
隣家は呪う

せりもも

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

隣家は呪う

【Nコード】

N5779V

【作者名】

せりもも

【あらすじ】

人は、いつどこで怨みを買うか、わからない。
無垢なものなど、ありはしない……。

その1

外が、うるさい。

マンションの前の駐車場で、五、六人の小学生が、バスケットボールについている。大きな、皮の競技用のやつだ。

ばっすん、ばっすんという音の合間に、ぎゃあぎゃあと、歓声というには生易しすぎる喚き声が響き渡る。まるで、そばにいる誰かが殴られたかのような衝撃を覚えたら、マンションの外壁に、ボールがぶち当たったのだ。

佐伯敦子は、溜息をついた。

午前中は、幼児と母親のグループが、駐車場を占拠していた。

小さい子だからと、侮ることはできない。プラカーや補助輪つき自転車の疾走する音は凄まじく、超音波のごとき、ものすごい奇声を発する子もいた。

母親たちもまた、世界に他人はいないとばかり、大声で談笑している。

通りに出て右・左、どちらに歩いても五分のところに、公園や広場があるというのに、このマンションの駐車場は、一日中、騒がしい。

これでは、気晴らしの散歩など、無意味というものだ。第一、出かける時も帰宅する時も、彼らの洗礼なしには通行できない。

敦子は、ずきずきとする下腹に手をやった。腰も、軽く痛む。

今日のように具合の悪い日、ボールをコンクリートにぶち当てる音は、本当に、神経に触る。横になろうにも、建物の床面に接する

面積が増えるがゆえに、座っている時よりも音が響いて、かえって辛い。

注意をする、もしくは、もう少し静かに遊んでくれるようお願いする、などということは、できそうになかった。

それどころか、外出時には、誰とも目を合わさず、まるで自分が悪いことをしているかのように、こそこそとエレベーターに乗り込むのが、常だった。

ここに引越して来た当初は、そんなことはなかった。

むしろ、今時珍しい、近所づきあいのある集合住宅だと、好ましくさえ、思っていた。外遊びする子どもたちについても、家でコンピュータゲームばかりしているよりは、よほど健康的でよいと、見かける都度、微笑みかけていたものだ。

いずれ、自分もまた、立ち話をする母親たちの一群に迎え入れられるとの見込みがあったからだ。

自分の子どももまた、近所の友達と外で元気に遊ぶとの未来が、予感できていたからだ。

しかし、未だ、敦子には、子どもがいない。

そして今では、子どもを嵩にきて、居丈高に振る舞う人々を、芯から恐れていた。

敦子は、近隣の騒音を注意しにいつて「逆切れ」された親から返り討ちにあったという情報を、ネット等で散見していた。

そうした「モンスター」な「親」の言うことは、容易に想像できた。

「親」にもなれない自分には、とてもではないが、「モンスター」な「親」には、太刀打ちできない。

一言でも反撃があったら、体が震えだすのではないかとの予感さ

え、敦子にはあった。

それは、ひとつには、彼女の、職業の失敗からきていた。

敦子は、小学校の先生だった。

ある保護者に、先生のうちの子への接し方は、いじめだと、言われたのが最初だった。

担任したクラスは二年生だったので、給食の盛り付けは、先生も手を貸す。

食の細いうちの子に、毎日毎日、大量に盛り付けて、と、唐突に非難された。

もちろん、敦子には、そんなつもりはなかった。どの子にも、同じように盛り付けていたつもりだ。

それから、執拗な電話攻撃が始まり、ついには、両親が、学校に乗り込んでくるようになった。誠実に対応したつもりでも、その対応が、新たな火種となった。

親が学校に抗議に行っても、授業中を口実にして、すぐに出てこない、応接室でなく、空いている教室で対応された、口のきき方が気に喰わない……。殆ど言いがかりだ。

誰も、学年主任や副校長でさえ、敦子をかばってはくれなかった。力尽きて、彼女は、退職した。

夫は、そんな敦子に理解を示した。だが実の所、この夫婦には、もっと切実な理由があった。

子どもが、欲しかったのだ。

アラフォーといわれる年齢に差し掛かっても、彼ら夫婦に、子ども

もはできなかった。

どちらの体にも異常はなく、すでに、A I H（配偶者間人工授精）も少なからず試み、悉く失敗していた。ストレスが原因だと思われる。それにフルタイムの仕事をしていれば、どうしても、施術のタイミングを逸しがちになる。

仕事さえ辞めてしまえば……そんな思いが、心のどこかにあった。

しかし、そうそう単純なものでもないらしい。退職しても、相変わらず、妊娠の兆候はなかった。年齢を考えると、体外受精を考える時期に差し掛かっていた。

体への負担が少なく、費用もあまりかからないA I Hと違って、体外受精は、あまりに人為的すぎるように、敦子には感じられた。

夫の啓介は、敦子以上に、抵抗を示した。数度に亘るA I Hへの協力で、すっかり腰が引けている。加えて、費用もばかにならない。「心配だな。採卵は痛いつていうぜ」
用心深い彼は、妻の体を労わる方針を取った。

結局、もう何回か、A I Hを試してみよう、ということになった。あと一回か……二回。それでだめだったら……子どものいない人生を送ることになる。

その貴重な一回が、今回だった。

それなのに、一週間ほど前から、口の中が渋いような痺れるような、あの感覚がやってきた。妙に寝つきが悪くなり、熱っぽい気がする。生理前の、高温期が来たのだと、気づいた。

それでも、必死で、A I Hはうまくいった、この腹には、小さな命が宿っていると、自分に思い込ませようとした。背中を丸め、体を温め、夫がやっとのことで絞り出した精子を逃すまいと、ただひ

たすら、安静を心掛けた。

今朝。磨き上げられた白い陶器の中に、毒々しい血の色を見た。敦子は、トイレに腰かけたまま、泣いた。

「車っ！」

下の駐車場で、女の子が叫んだ。その甲高い声にのしかかるようにして、けたたましくクラクションが鳴り響く。続いて、幾つかの、真に迫った悲鳴。きいーっという金属性の、幼児の叫び声が、一際鋭く耳朶にこだまする。

一瞬そばだてられた敦子の耳は、だがすぐに、それら悲鳴の奥に、親しげな笑いの気配を感じ取った。案の定、バンのドアが開く、ゴオーツ、という音がして、盛りを過ぎた女の声が、複数の子の名を呼んだ。アイスを買ってきた、と言っている。

事故かと、一瞬でもうろたえた自分が、馬鹿に思えた。

……轢かれればいいのに……。

思わず心に湧いた密かな声を、気がつくと、敦子は声に出してつぶやいていた。

「みんなみんな、車に轢かれて死んじゃえばいい……」

その2

友達が来ない。

うちで遊ぼうって誘ったのに、友達が来ない……。

ボールを手に持ったまま、少女は、憮然としていた。正確には、「うちで」ではなく、うちの前で、だが、まあ、似たようなものだ。少女の住むマンションの前には、広い駐車場がある。

少女の家では、最近赤ちゃんが生まれたばかりで、友達を上げることが禁じられていた。それでも、家の前には、こんなに広い場所があるのだから、遊ぶのに何一つ、不自由はしない。

随分待って、退屈していた。一人で、ボールをついてみる。隣の棟の外壁に当ててもみたが、なんだか、すごく大きな音がして、二〜三回でやめてしまった。たくさんの人が住んでいる筈なのに、昼間は、人の気配がない。きっと皆、働きに行っているのだろう。

友達がいないと、周りは寂しすぎる。

この頃、こういうことが多くなったなあ、と、少女は思う。約束をしても、来なくて、次の日、どうしたの、って聞くと、塾があったとか、水泳に行ったとか、言うのだ。まあ、みんな忙しいのだからうけど、それなら最初から約束なんてしなればいいのに。

つまらない、つまらない。

最近、恵美ちゃんと雪ちゃんがバレエを習い始めた。少女も一緒

に「レッスン」に行きたかったのに、お母さんに駄目だつて言われた。

赤ちゃんが生まれたばかりで、大変だから、だそうだ。

恵美ちゃんと雪ちゃんは、学校でもバレエの話ばかりして、少女は、話に入れない。今日、「レッスン」がお休みだと聞いて、それなら一緒に遊ぼう、と誘った。ちよつとあいまいな感じだったけど、確かに二人は、頷いてくれた。

久しぶりで友達と遊ぶのが楽しみで、少女は、学校から飛んで帰った。ランドセルを投げだすとすぐにここへ来て待っているのに、恵美ちゃんも雪ちゃんも、来やしない……。

また、ボールをついてみる。鞠つきじゃないんだから、一人でついていたって、おもしろくもなんともない。やっぱり友達がいて、ボールを取ったり取られたりしないと、バスケットボールの意味がない。

バスケットだけは自信があった。少女は上背があったので、やすやすと相手からボールを奪い取り、ゴールに押し込むことができた。このボールは、誕生日に、お父さんが買ってくれたものだ。皮のボールで、本格的な競技用だという。

しかし、こんなところで一人、ボールをついていると、なまじ立派なボールだけに、余計、虚しさが募ってくる。

どこかの家の玄関が開く音がして、ぱたぱたと軽い足音が走ってきた。

「遊んでー」

近所のマサ君だ。ボールの音につられてきたのに違いない。

少女は、うんざりした。マサ君は幼稚園年少組で、誰かが外で遊んでいると、しつこくつきまとって、遊んでもらおうとする。

少女も何度か遊んであげたけど、とにかくわがままで、すぐに大声で泣き喚く。そうすると、お母さんが血相を変えて飛び出してくるのだから、恐ろしくてしようがない。

そもそも、小学生が幼稚園児と遊んで、何が楽しいものか。少女は特に、小さい男の子が嫌いだった。彼女の家で、いつもお母さんを占領している赤ちゃんも、男の子なのだ。

マサ君が声を張り上げる。

「ボール。貸ーしーてっ!」

貸してなんか、あげない。これは、誕生日にもらった、大事なボールなんだから。競技用の皮製なんだから。前にちよつとだけ触らせてあげたら、マサ君のお母さん、突き指しちゃうって、ぶーたれてたじゃない。

「貸ーしーて! 貸ーしーてっ!」

マサ君はしつこい。もうすぐ、ぎゃあぎゃああと泣き喚き始めるのではないかと思われた。

そうしたら、あのお母さんが出てくる。

跳ね上がったボールを、ぱつとつかんで、いきなり、少女は駆けだした。

十メートルほど走って、振り返ってみると、後ろからマサ君が、よたよたと追いかけてくる。

「待てーっ」

きやあきやあ笑っている。鬼ごっこ勘違いしているらしい。

わずらわしかった。なんとかまいてやろうと、階段を駆け上った。途中の踊り場から下を向くと、なんと、ちびすけが、エレベーターに乗り込むのが見えた。

三階まで行きつき、エレベーターの前まで行って、表示を見ると、いましも、この階で止まろうとしている。

幼稚園児と思って油断をしていたが、侮れないところがある。階段まで少し距離があるから、走っても間に合わない。このままだと、夕方の鐘が鳴るまで、つきまとわれてしまう。

チン。

エレベーターが鳴ったその時、向かいの家の、玄関ドアが開け放たれているのに気がついた。

何で入ってしまったのだろう。気が付くと少女は、その家の中にいて、ドアを、そうっと占めていた。

かちや。

小さい音がして、ドアが完全に閉じてしまうと、途端に、静寂の気配が耳を満たした。重い鉄の扉が、約束を破った友達も、マサ君も、少女にとっての世間を全て、シャットアウトしてした。

入ってすぐの右手には、細長い靴箱があった。少女の首ほどの高

さのその上には、ガラスのケースが置いてあり、目を瞠るほど美しい人形が、青い目で、少女を見下ろしていた。

金色の髪が、豪華に広がっている。ドレスは、ワインレッドの、すべすべした光沢のある布地で、レースをふんだんにあしらったその裾は、何段にも重なって、ふんわりと足元を覆っていた。

……あなた、誰？

人形が冷たく聞いた気がした。にわかには少女は、無断で他人の家に入り込んでしまったことに、深い罪悪感を抱いた。

しかし、今ドアを開けると、あのマサ君がまだ、うろろろしているかもしれない。少女がここにいるのに気がついたら、よその家に入ったと、あちこちで言いふらすにきまっている。

……お母さんが聞きつけたら、きっと、ものすごく叱られる……。

そうでなくても、赤ちゃんが生まれてから、母親は、怒りっぱくなっていた。

上り框はひどく高く見え、同じマンションなのに、見慣れない造りだった。コンクリートの三和土には、女物のちよっとばきのサンダルが一足、出ているだけだった。片方が横倒しになっている。

少女の家の玄関には、色とりどりの靴が何足も出っていて、右と左が離れ離れになってしまっているものもある。靴を履くときは、いつも大騒ぎだ。いつもはわずらわしい自宅の玄関が、今は、少しだけ、いいものに思えた。

……もう、マサ君は、行ってしまったかな。

いつまでも愚図愚図していると、奥から、家の人が出て来そうに思われた。ドアを開けっ放しにしたまま、外出しているなんてことは、まず、ないだろう。

少女は、ドアノブを握った。あ、指紋が残っちゃう、と不安になった。他人の家に入り込むのは、いけないことだ。しかし、泥棒や殺人をしたわけではないから、「科捜研」も、ドアノブの指紋を調べたりはしないだろうと思いつき、少し安心した。

ノブは、ひんやりと冷たかった。音をたてないように気を付けてドアを開けようとして、ぎょっとした。

まわらない。

ノブが、回らない。

ドアが開かない！

慌てて、もう、音のことも指紋のことも忘れて、ノブを両手で握り、がちゃがちゃと揺さぶった。

同じことだった。ドアノブは、何かに固定されているかのよう、ドア板の内部へ真っ直ぐに埋まったまま、びくともしない。

その3

頭の中が、かぁーっとなった。

どうしよう。

外へ、出られなくなっちゃった。

しばらくの混乱の後、凄く怒られるかもしれないけど、この家の人に助けてもらおうしかない、と思い定めた。

「あおう。誰かいますか。あおう。あおう……」
細い声が震えた。

懸命の呼びかけにもかかわらず、奥からは、誰も出てこない。

少女は、もじもじした。さっきから、トイレに行きたくてしかたがないのだ。

ここの三和土は、ひどく寒い。冷たい鉄のドアが、氷の塊のように背後に聳えている。

来ない友達を待って、長いこと外にいたことも、悪く作用していた。

「トイレを貸して下さい。お邪魔します」

もうこれ以上、我慢することはできない。

意を決して、少女は靴を脱ぎ、ひどく高く見える、上り框の上に足を乗せた。

ぐしゅ。

気のせいか、何ミリか、足が沈んだ気がした。
靴下を履いた足の裏に、じっとりとした湿り気を感じる。

だが、深く考える余裕はなかった。

幸い、トイレは、少女の家と同じ所にあつた。

彼女の家のトイレは、キャラクターの小物や芳香剤であふれていたが、ここは、大分印象が違う。

カーバやタオルは無地の白、余計な装飾品は、一切ない。
寒々しいほど、素っ気ないトイレだった。

むきだしのお尻が心細く、少女は、大急ぎで用を済ませた。

ぐしゅ。

トイレを出ると、また、足が沈む。

それに、鼻を刺すような変な匂いがする。

家の中は薄暗く、寒かった。

誰もいないような、誰かが潜んでいるような、不安な感じがする。
だが、何かに思考力を奪われているようで、深く考えることができない。

脳に力が入らないような、頼りない心地がする……。

「ああちゃん」

奥の部屋から、誰かが呼んだ気がした。

「ああちゃん」

少女は、ふらふらと、声のする方へ向かった。

「ああ……」

新品のランドセル。かわいらしいセーラーカラーのブラウスと同じ布地のスカート。真新しいノート、鉛筆、そして夥しいほどの子ども向けの本……。

それらが、部屋のおちこちに、とり散らかっていた。

部屋の隅には、黄色のおもちゃ箱が寄せられていた。

中には、ままごと道具やゴムボール、着せ替え人形などが、ぎっしりと詰め込まれているのが見て取れた。

……ワタシハ、コノ部屋ヲ、知ッテイル……。

我を忘れるほどの、強烈な既視感だった。

同時に、彼女は、理解した。ここは、自分の部屋なのだ。

否、実際にここで暮らしたことなどない。

けれども、この部屋は、彼女の為に設えられ、その訪れを、今か今かと待ち続けている……。

部屋の隅には、勉強机さえあった。

木目に傷一つない、真新しい天板の上では、熊のプーさんがプリントされたカップが湯気をたてていた。

おいしそうな丸いクッキーがたくさん盛られた皿も、添えられている。

まるで、部屋の主と定めた女の子を、誘い込むかのように。

意思とは無関係の所で、少女は、このおやつを頂くべきだと感じた。

それが礼儀だと思えたのだ。

しかし……。

少女の母親は、クッキーを皿に盛ったりしない。

スーパーで買ってきた箱のまま、無造作に手渡す。

このクッキーは、お母さんのくれるものとは違う。だから……。

……食べテハ、イケナイ。食べタラ、モウ、帰レナクナル……

鈍くなった頭のどこかが、そう、警告した。

食べるべき。

食べては駄目。

二つの意思がせめぎ合い、少女は途方に暮れた。

もどかしい思いは、少女だけのものではなかったようだ。

突如、ピンクを基調とした花柄のカーテンが揺らめいて、壁が、ぐぐつと、膨らんだ。

おもちゃばこからうさぎのぬいぐるみが溢れ落ち、天井の電器が、かたかたと音を立てた。

思わずよろめいた少女の足元で、何かが、フエエー、と泣いた。

赤ちゃん人形だった。

口を尖らせた、ミルク飲み人形だ。その柔らかな腹を、少女は踏み潰していた。恨めし気に、少女の足の下から覗いている人形の顔は、生まれたばかりの弟にそっくりだった。

「いやっ！」

無我夢中で、部屋を飛び出した。

玄関の見当へと走る。

足がもつれるようで、もどかしい。

だが、さっきまで玄関だったところは、畳を敷いた和室になっていた。

赤茶けた畳がぎっしり敷かれていて、踏み込んだとたん、足が、ずぶずぶと、下に沈む。

どこまでも沈み、根太がないようだ。

冷たく湿気った感触は、底なし沼をさえ、思わせた。

その4

日本間の片隅には、大きな仏壇が置かれていた。

観音開きの扉の片方が、まるで本体から剥がれ落ちるように、三割方、外れている。

仏壇の中は、真っ暗だ。

……何か、とんでもなく恐ろしいものが、祀られている。

正視できない。

不意に視線を感じて目を上に転じると、セピア色に色あせた写真が見下ろしていた。

女の人だ。

少女の母親より、もう少し年上の、細面で、寂し気な顔立ち。

何かを言おうとして、口の端を、きゅっと引き揚げ、けれども、とうとう何も言わずに一生を終えてしまったような、儚い夢、幻……。

……知ッテイル。ワタシハ、コノヒトヲ、知ッテイル！

「ああちゃん……」

仏壇の中から、女の声が少女の名を呼んだ。

ぞっと、全身に寒気が走った。

とにかくこの場から、逃げ出したいと思った。

しかし、気がつくのと、赤ん坊の、いや、二丁三歳の幼児の、そしてまた、幼稚園くらいの子どもの、おびただしい衣類に、周囲を取り囲まれていた。

襦袢^{むじき}。肌着。涎掛け。

ベビードレス。ロンパース。

小さなTシャツ。トレーナー。タイツ。吊りスカート。

それらは、和室の隅の箆笥から、後から後から、溢れ出てくる。

明らかに手編みとわかる、崩れた編み目のセーターがあった。

袖つけの縫い目があった、よそ行きのワンピースもあった。

色とりどりの子ども用の衣類が、少女を取り囲み、足にまとわりついてくる。

子ども服は、音もなく流れよせ、次第に嵩をまし、少女を、溺れさせようとする。

どこからか、幼い子どもの笑い声が聞こえてきた。楽しそうでありながら、意思の疎通を拒んだ残酷さははらんでいる。

笑い声は、幾重にも重なり、少女の耳朶をしつこく穿ち続ける。

黄色い帽子と共に、見覚えのあるブラウスが、ふわっと舞い上がった。

薄い水色の身ごろに、濃いブルーのラインの入った大きな襟のそ

れは、昔、少女が通っていた幼稚園の制服だった。

両袖を広げ、少女の顔を覆おうとするかのように、宙を飛んでくる。

避けようと、夢中で身をよじった。

がたん。

服に襲われ、倒れかけた体が、障子を突き倒した。少女は、廊下に転げ出た。

……逃げ……。

もつれる足で、必死で走る後ろから、幼児の笑い声に混じって、女のけたたましい哄笑が、ぞっとするほど甲高く響き渡った。

原色の楽しげなデザインの洋服たちは、少女を追って廊下に溢れた。

さわさわと衣擦れの音を立てながら、着実に量を増やして、波うち、押し寄せてくる。

幼い者の足音が、ぱたぱたと、重なっておいかけてくる。

少女は、真っ直ぐな廊下を走り、長く脚を伸ばしたパンタロンに足元を掬われそうになりながら、突き当りの部屋に駆け込んだ。

その5

先端に迫った、パンタロンの裾を挟むようにして、ぎりぎりのところで、内側から引き戸を、ぴしゃりと閉めた。

どっと、静寂が押し寄せた。

少女は、荒い息をついた。

ばしゃん。

不気味なまでの静けさの中に、微かな水音がした。

湿った匂いが、一層強烈になった。

窓から差し込む一条の光が、埃の筋を細く照らし出し、ガラス戸にぶちあたる。

ここは、脱衣場のようだ。

ガラス戸の奥は、風呂場であろう。

ばしゃん。

音は、風呂場から聞こえてくる。

風呂場は、脱衣場よりも明るかった。

バスタブに浸かった人影が、ぼんやり、桃色に透けて見えた。

誰がいる！

助けてもらえるかもしれない……。

そう思ったのは、その人が、あまりにのどかに入浴しているように見えたからだ。

肩までゆつたりと湯につかり、時折、水音を立てながら、湯をかきまわしている。

「あとう……」

一步を踏み出したその時、ガラス戸が、するすると開いた。

たまらぬ湿気と熱気が押し寄せ、思わず目を閉じた。

「ぐうぐうと、吹き寄せる熱い風が、少女の全身をなぶる。

「あ……あ……」

死にかけてた鳥のような声が、繰り返す。

少女は、自分の名を呼ばれていると気がついた。

まつ毛を熱風に焦がしながら、必死で目を開ける。

猫足の、しゃれたバスタブの中から、小さく凝った、赤黒い肉の塊が、こちらを見ていた。

縮れた髪の毛が、それでも少しだけ、あたまのてっぺんにへばりついてた。

強烈な臭気が、襲ってきた。

人間の肉から抜けきった脂が、長い時間をかけて、ぐらぐらと煮
尽くされた臭みだ。

「あ……あ……」

茶色く濁った湯が波立ち、肉がすっかり煮溶けて、白い骨ばかり
になった右手が現れた。

華奢な手首をぎくしゃくと曲げて、もどかしそうに、おいでおい
でをする。

手につられて、頭部が、ぐらりと揺れた。

固く煮詰まった肉の間から、不自然に黒い瞳が、そこだけ黒々と
光って、こちらを見透かしていた。

少女は、悲鳴をあげた。

声を上げなければ、気が狂ってしまいそうな気がした。

いつまでも悲鳴を上げ続けた。

その6

敦子は、インターフォンの音で、はっと目が覚めた。

生理中の体調不良から、つい、うとうとと眠ってしまったらしい。

駐車場のボールの音は、いつの間にかやんでいる。

宅急便だった。実家から、みかんを送ってきたのだった。

送り状に書かれた故郷の町の名を見た時、夢でみた、遺影の女が誰であったかを思い出した。

母に、みかん到着の礼の電話を掛けたついでに、さりげなく聞いてみた。

「お向かいの……鈴木さんのおばさん、元気かな？」

「ああ……」

いつも元気な母の声が驚った。敦子は、幼い頃、なにかと自分がかわいがってくれたその婦人が、すでに亡くなっていたことを知らされた。

「お風呂に入ってる、ね。

一人暮らしたから、長いこと気づかれなくて……」。

親戚の人が訪ねて行ったら、風呂桶の中で、ひどいことになっていたみたいよ……」

敦子は絶句した。

母は、なおも続けた。

「あの人、とうとう子どもができなかったからね。随分欲しがってたけど。」

それがね。

家の中から、新品の子ども服やおもちゃなんかが、わんさとみつかったんだって。」

「子ども服……」

「あのだ。」

今だから話すけど、実は、あんたを養女に欲しいって言われたことがあるんだよ。

でも、うちだって、女の子はあんただけでしょ。

もちろん、すぐに断ったわよ。でも、しつこくてね」

「……その服やおもちゃって、私の為に？」

「そんなこと、わかりゃしないよ。」

でも、ちよくちよく、あんたのサイズを聞かれたわね」

敦子の目に、かわいらしい小さなものを買いあさる、婦人の姿が浮かんだ。

しかし、彼女は、それを、隣家の女の子に渡すことができない。

養女を断られ、女の子の母との間に、何らかのわだかまりができたのだろう。

そして、時だけが流れた。

子どもが喜ぶ、かわいらしい品物は、

新品のまま、古びていった。

パッケージさえも開けられることなく……。

「よく遊んでもらってたのに、わたし、お葬式にもお墓詣りにも、行ってない。」

それどころか、亡くなったことも知らなかった……」

「本当は、あの家に、あんたを遊びにやるのは、いやだったんだよ。でも、子どものいないあの人が、かわいそうでさ」

そういう母の口調には、いくばくかの優越感が感じられた。幾たりか子を産んだ女の、優越感だ。

敦子の、孕むことのできぬ子宮が、どろりと血を流した。

ボールの音が再開された。遙か下の駐車場から、近所の子らの歓声が沸き上がる。

敦子は、ぴくっと震えた。

人であることの、深い悲しみが、肌沁みた。

その6（後書き）

未だに、最後の一行について、悩んでいます。

これがない方が、余韻が残るような、でも、……。

ご意見を頂戴できれば、嬉しいです。

お読みいただいて、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5779v/>

隣家は呪う

2011年8月12日13時29分発行